

巻 頭 言

情報公開、規制緩和、ネットワーク社会など世界や市民に開かれたオープンなシステムが日本の政治、経済、文化に、今求められている。人間関係トレーニングや心理臨床でも「開かれている」ことは重要な意味を持っている。ロジャースは健康なパーソナリティーの一側面として経験に対して開かれていることを挙げた。カウンセリングが進展するためにカウンセラーに求められる態度の一つとしても、経験に開かれ、自己一致していることが重視されている。今の日本のように、閉塞感が高じている時には、開かれることが希求されるのは当然のことであろう。閉じられ、縛られた世界からの解放は自由と拡大と実存の感覚を与える。しかし、その解放はあくまでも一つのフェイズである。安定、定着、成熟の 때가やってくれば、その時点での枠が小さく、縛られている、何かが違うという感覚がいずれ訪れる。

ユングは心理的過程における重要な節目には、死と再生の様相を呈することを明らかにした。開かれる前には、死が訪れ、闇の世界を旅しなければならない。その苦しい旅の後に、再生がやってくる。太陽が死に、夜が訪れ、また生まれるように、人間の心理的過程において、光と闇、意識と無意識の統合が心の成長に必要となる。社会的、文化的にも、異文化との出会いと統合に、その過程は見出せる。異文化との出会いは新しい文化、生き様を与えてくれる。しかし、統合は葛藤や心理的防衛を乗り越えたところにしか生まれえない。既存の何かを捨てねばならず、痛みや哀しみが伴う。

社会における様々な制度や組織は個人の在り方に影響を与える。その力は決して小さくない。グローバルな視野から見ると、自分の力はちっぽけに見える。何もなしていない、なすことができない無力感に陥る。しかし、先日NHKの『未来潮流』で鶴見俊輔氏が日本の精神、文化、制度について述べているのを聞いた時、昨今、耳にするグローカル（グローバルとローカルの造語）という言葉思い出した。個人内の意識と無意識が相互に影響を及ぼしあうごとく、社会の制度、組織は個人の在り方に影響を与える一方で、個人の精神からの影響も受けている。我々の心は過去から受け継いできた精神文化の伝統と今、ここでの経験が総合されたものである。そこには未来への志向性や萌芽も含まれている。それらが複雑に交錯し、影響しつつ、時代精神を生み出す。時代精神の担い手は他ならぬ個人である。我々は様々な背景、歴史を持ちつつも、今、ここに生きることしかできない。自分が生きている場においてのみ、他者と共に生きることができる。そこには新しい何かが生まれてくる可能性がある。その何かが大きな流れ、うねりの一つの波となることもあろう。核戦争が避けられるかは、「一人ひとりの人が自分と対立する意見が生む緊張に、どれくらい耐えられるか」にかかっているという意のことを、第二次世界大戦後、ユングが述べたと聞く。ロジャースの言う開かれた態度は、様々な在り方や可能性を許し、それを受け入れようとするものである。開かれようとしている今、我々は違いを受け入れ、葛藤を乗り越えていく準備や覚悟ができているのだろうか。制度や文化、精神性において、何を与え、得て、捨て、生み出していこうとしているのだろうか。

（楠 本 和 彦）